研究

平衡價格と平均生産費

手塚壽郎

一

稱呼上の簡明を期する目的を以て、こゝに「平衡價格と平均生産費」なる題目を掲げたのであるが、一見して充分な意味を讀み取られ得るやうになさうとすれば、「自由競爭下の平衡價格と限界生産費並びに平均生産費」とせらるべきものなのである。

擴充せられてこのやうな題目をもつべき問題は、既にリカルドの昔に解決されて、しかも解決は決定的であり、解決の說明の仕方に粉飾が種々なる形で加へらるゝことがあつても、其根本に何らの變化さへもあり得な

かつたのではないかとさへ思はれる。また其根本に何らの變化もあり得ないのではないか、換言すればリカルド的な解決は確乎不動のものでさへないかと思はれるのである。然るに過ぎ行きしほど十年内外の間に、二つの重大なる異説が公にせられてゐる。其一つは逝ける猪俣津南雄氏によつて「中央公論」四十五卷二號に力强く主張されたものであり、他の一つは Henry Schultz によつて Journal of Political Economy, October 1929 に寄せられた Marginal Productivity and the General Pricing Process 中に恐らくは力强く最初に明瞭に主張されたものである。此後者の形の異説は、我國に於ては一般人士の間には今も充分に信奉者をもつてゐるとは思はれないが、新進の理論經濟學者の間では、歐羅巴及び亞米利加の學者の間に於てと同樣に、まさに常識とさへなりつゝあるのである。私は實のところ、自由競爭下の平衡價格がリカルドのなせる説明の如くにして成立するとの見解を採るか否かによつて、其人がマルキシストであるか否かを判定されると考へるほど、リカルドの説明を重要視してゐた。學者はリカルド流の説明にも近來の異説にも近來左程の關心をもつてゐないのであるかどうか、我國では二三の學者を除いては、重要としか私には思はれない此問題に今や多くの關心を寄せてゐないやうに見える。恐らく、理論經濟學の講述者の誰人もが觸れてゐるに相違ない問題でありながら、講壇のそとに於いて左程の關心事となつてゐないとすれば、シャルツ等の新説が私の形容通りに我國の學者の常識となりつゝあるのでもあらうか。

私は此問題について充分に周到なる用意を以て研究をなしたわけではない。周到なる用意を以て研究をなさ

うとする出發點に佇んでゐるだけである。今は何人の著書や論文によつても影響を受けてゐないありのまゝの自己の所見を陳開するのも、人の物笑ひの種位にはならうと考へつゝ、試みをなさう。猪俣氏の所論はジヤーナリズムに横行濶歩したものであるから、今更それに觸れることは著しく新鮮味を缺いではゐるが、自由競爭下の平衡價格と限界生產費並びに平均生產費なる問題の解決の從來の仕方に對して一大巨彈を放つたものであつて、一應簡單にそれにタッチすることはなされねばならぬことのやうに思はれる。

二

猪俣氏の所論は、それが現はれた當時早稻田大學の教授であつた二木氏の論說（中央公論四十四卷三號）に對する批判として、提出されたものである。從つて、此古い論文に往見することなかるべき此拙稿の讀者を豫想する限りに於ては、二木氏の論說のスケリトンを述べて置く必要がある。そして成るべく忠實を期せんがために、論敵が要約してくれたものに據つて叙述をなさう。二木氏によると、商品の需要と供給との平衡點として、商品價格變動の中心點をなし、其意味に於て市場を統制し、市場價格を規制するところの市場價値又は市場生產價値は、結局において其商品の價値又は生產價格によつて決定されるとしても、其商品種に屬する個々の商品の價値又は生產價格の大いさは、生產のために投ぜられたる個々の資本――等量的構成の資本――が有利な生產條件の下に作用するか、不利な生產條件の下に作用するかによつて異るであらう。ひとしく米にして

も、不利な條件の下に生産せらるゝ一石は、有利なる條件の下に生産せらるゝ一石に比して、より多くの勞働を要し、費用を要し、從つてより多くの價値を含み、より大なる生産價格をもつであらう。そこで米なる商品の市場價格または市場生産價格は、米總體の各部分によつて異る所の大小樣々な個別的な價値又は生産價格の何れによつて決定せらるゝかの問題を生ずる。少くともそれら大小の價値または生産價格の平均的なもの、即ち平均的價値又は平均的生産價格によつて決定されるか、それともそれらのうちの最大なるもの、即ち最も不利なる生産條件に基ける特殊の個別的價値又は個別的生産價格、即ち限界的價値または限界的生産價格によつて決定されるかの問題を生ずる。と同樣にまた米なる商品の需要供給の平衡點として價格變動の中心點をなし其意味に於て市場を統制して市場價格を規制する所のものは、此限界的に決定された市場價値または市場生産價格であるか、それともかの平均的に決定された市場價値又は市場生産價格であるかの問題が生ずる。然るにマルクスは一般に、平均的生産價格が市場價値、市場生産價格を規制し、かゝる市場價値こそが市場統制的な價値、市場統制的な生産價格として、商品の價格變動の中心點をなし、その意味に於て市場價格を規定すると說く。即ち平均觀察こそがマルクスの經濟理論の樞軸をなしてゐるのである。然し斯樣に平均的價値又は平均的生産價値が市場價格または市場生産價格を決定し、これらのものが市場價格を統制する限り、較差地代なるものは決して生じない。較差地代を生じ得るのは、たゞ農業生産物の市場價格が生産條件の最劣等な耕作地即ち限界にある耕地に投ぜられた資本の生産物の個別的生産價値または個別的生産價格――即ち限界的價値また

は限界的生産價格によつて統制される場合に限られる。そこでマルクスに許された道は、(一)較差地代の分析においても忠實に平均觀察の立場に立ち、其本來の立場からは到底較差地代を説明し得ないことを正直に告白し以て資本論の根幹たる彼の價値法則――まさに此平均觀察に基く所の價値法則の遂に把握し難きを率直に認めるか、それとも、(二)較差地代の論究に至るや、急遽價値決定の限界原理に縋りつき、それによつて較差地代を説明して、理論的一貫性を打ち破るか、此ら二つの一以外にはないのである。マルクスは後者の方法を選んでゐる。

此二木氏の所論に對し猪俣氏によつてなされた批判の全體は、私のこゝでの問題には關係がない。此批判の一ポイントとして、個別的生産價格の平均が市場價格を規定するものであるとの主張を展開した部分のみが、私の問題にかゝはるのである。從つて私は猪俣氏の所論のうちの其部分だけを取りあげる。氏は市場價格が個別的生産價格換言すれば生産費の平均によつて決定せらるゝものであると主張して、二木氏のマルクス攻擊に對して、マルクスを擁護せんとするのである。然らば猪俣氏が、市場價格は生産費の平均によつて決定されると主張する證據は何處にあるのか。

猪俣氏は曰く、「たゞの一顧で足りることだが、諸々の個別的生産價格の平均的な大いさと相容れないやうな生産價格が、果して市場統制的な限界生産價格たり得るだらうか。全耕地六百萬町歩から取れる六千萬石の米のうち、その千分の一と云ふ僅小部分の六千石は全耕作地の千分の二足らずの一萬町歩と云ふ僅小部分の最

劣等地、限界耕地で生産され、それの石當りの生産價格三十二圓が限界生産價格即ち最高生産價格であるときに、殘餘の壓倒的に大なる部分を代表する五百九十九萬町歩からとれるところの五千九百九十九萬四千石が石當り平均生産價格は三十二圓ではなくして、三十圓に過ぎなくても、尙かの大海に涙一滴ほどの少量な限界生産物の限界生産價格三十二圓が市場統制的であり得るだらうか。經濟學ならずとも、健全なる常識ならば躊躇なく否と答へる。俗流經濟學者ならざれば否と答へる」と。[illegible]

こゝに猪俣氏が常識論を持ち出したのは不適當である。吾々が從來、また二木氏が、價格を規制するものは限界生産費であると云ふ場合には、自由競爭が完全に行はれてゐるところの抽象的な市場に於て價格が如何に成立するかを、經濟科學の觀點に立つて言つてゐるのである。價格が平均生産費によつて規制せられると云ふことは、常識で明らかだと云ふ說明は、理論經濟學上の理論と現實とを混同したゝめに起つた誤ではなからうか。たとへ六千萬石中のわづか六千石の米の一石の生産費が三十二圓であるときに、常識は直ちに價格は此生産費によつて規制せられないと云ふとするも、理論經濟學は此常識を拒否するのである。のみならず六千萬石中の五千九百九十九萬四千石が三十圓の生産費で生産せられるのに、たゞ六千石のみが三十二圓の生産費で生産せられつゝあると假定するのが既に常識に反する。殆んど全部の米が一律に三十圓の生産費を以て生産せられるやうな場合には、三十二圓の生産費を必要とするが如き米は當初から生産せられないであらう。故に僅か六千石が三十二圓で生産せられると云ふ場合には、勿論此供給が需要を充すための不可缺のものであることを

豫想してゐる。不可缺の供給でないものが三十二圓で供給せられると云ふことは、吾々は今當面の假定の下では考へることが絶對に出來ない。吾々は不可缺の供給と云ふ神祕化せられた概念を用ひてゐると猪俣氏は云はれたが、不可缺なる供給なる概念は決して神祕的なものではない。此供給が出現せざる限り、供給は需要より小であると云ふ意味に於て不可缺であると云ふだけである。從つて價格は此不可缺なる供給の生産費を償ひ得るやうに騰つて行かねばならない。

先の引用を含んでゐる所には、價格が平均生産費によつて決定されると云ふ理論的な説明は猪俣氏によつて與へられてゐなかつた。然し此説明を強いて求むれば、それは第十頁の記述であるかも知れない。曰く、「そこで吾々が現實へと行くならば、突然にして短命な需要激增の場合のほかは、即ち常態的な場合には、總じてどの生産部門に於ても限界生産價格の支配を見出すことが出來ないと同時に、すべての生産部門に於て平均的な生産價格が支配するのを見、從つてまた自己の生産價格以下の市場に於て商品を生産し續けてゐるところの活き〳〵とした限界資本家達の一群を發見するであらう。彼らは、自己の生産價格以下で賣るところから平均利潤の全部はこれを得ることが出來ぬ。たとへ平均以下の大いさにせよ、多かれ少かれ利潤を得る。そしてただ單に自己の生産價格で賣れないからと云つて、また單に平均利潤を得ぬからと云つて、それだけの理由では彼らが敢へて轉業しようとしないのは何故かと見るならば、それはいづれの生産部門にも平均利潤をあげ得ない限界資本家達が事實に於いてあるからである」と。然し此説明は説明の如くにして、實は説明ではない。

petitio principio である。「資本家が……自己の生産價格で賣れないからと云つて、また單に平均利潤を得ぬからと云つて、それだけの理由では彼が轉業しようとしないのは何故かと見るならば」の理由を求めて、他の生産部門にも同様の事實があるからだと云ふのは、説明せんとする原理を既に豫想してゐるのである。猪俣氏にしてもし平均利潤以下で滿足する資本家を考へようとしたら、其存在理由を直接に證明せねばならなかつたはずである。吾々が考へつゝある抽象的純粋經濟社會に於て、限界生産者のみが何故に少い利潤で滿足してゐるかを直接に證明すべき筈であつた。

ところで此證明は不可能であらうが如くに私には見える。具體的なる現實に於ては、非經濟的理由から、均等化された利潤さへもかなぐり捨てゝゐる限界生産者もないわけではない。否種々なる動機から、明らかなる損失をしのびつゝ生産に從事してゐる生産者さへも少からず存在する。だがこゝで問題としてゐるのは抽象的な理念的な純粋經濟社會に於て、從つて純粋な經濟人によつて、價格が限界生産費によつて決定せらるゝか又は平均生産費によつて決定せらるゝかに關する。かやうな經濟人たる限界生産者が、まだ若干の利潤が得られるからと云つて、他の高い利潤を生ずる生産に移り行かぬであらう理由は、私には見出し得られない。

けれどもこの論理的誤謬にもまして大なる論理的缺陷が、猪俣氏の平均と稱する概念のうちにありはせぬであらうか。

猪俣氏は何らの説明もなく、しきりに平均生産價格と云ふ。然し其平均生産價格とは如何なる生産價格の平

均なのであるか。平均には平均せらるべき項がなければならぬのは云ふまでない。一石當り三十圓、三十一圓三十二圓等の生産費が明らかになつてゐて、初めてそれら三石の平均生産費が明らかになるのである。從つて平均を見出すには、平均の値に算入せらるべき最初の項は勿論、次々の項も、また算入せらるべき最後の項も知られてゐなければならぬ。此らの項の何れが缺けてゐても、平均値は考へ得られない。

五人の人あり、米一石を夫々卅、卅一、卅二、卅三、卅四圓にて買はんと欲し、他方に米一石を各卅、卅一、卅二、卅三、卅四圓の生産價格にて賣らんとしてゐる人が五人ある場合に、吾々に從へば、價格は需要供給の一致する高さに定まり、此價格は限界生産費卅二圓に一致する。換言すれば、需要と供給とを適合せしむる米の數量のうち、最大の生産價格を要したる一石の生産費によつて米の價格は定まるのである。

嚴密に云ふと、限界生産費が價格を決定するのではない。需要供給が適合する點に價格は決定する。この原理だけが自由競爭下の平衡價格決定の原理である。否これがあらゆる場合の價格決定の原理である。公定價格の定められてゐる場合の價格決定の原理でさへもある。所で自由競爭が行はれてゐる場合に、需要供給の適合した狀態を見ると、價格は賣買せられた財貨の單位のうちで最も大なる生産費を要した所のまさに其生産費に一致してゐる。此最大の生産費――賣買せられた單位中の最大生産費――を人は限界生産費と名付けてゐる。だから限界生産費が價格を決定するのではなく、需要供給の適合が價格を決定するのであり、其價格が限界生産費に一致してゐるわけであるに過ぎない。之を通俗には、價格は限界生産費によつて決定せられると表現す

る。

價格が需要供給によつて定まり、此價格は限界生産費に一致してゐるとすると、賣買せられた財貨の平均生産費なるものは容易に見出される。需要と供給とを適合せしむる米のうち、最大の生産費を要したるものが、平均せらるべき生産費のいくつかの項の最後をなすからである。

然るに猪俣氏の理論にあつては、價格は需要供給の適合點に定まるのではなく、平均生産費が價格を決定すると云ふ。從つて氏の理論のうちには、生産費が平均せらるべき最後の項を定むべき何ものもない。抽象的に米一石の生産費と云へば、生産費は生産高の函數として如何なる値をもとることが出來る。最後の項を定めずして平均生産費と云ふが如きは、全く無意義である。猪俣氏によれば、生産費の最後の項が明らかである以前に、平均生産費が定まつてゐることゝならねばならない。未だ決定せられざる最後の項が既に豫想されてゐるわけである。

勿論同じく平均であつても、平均せらるべき最後の項を嚴密には必要としない平均がある。モードがそれである。モード(mode)はもとフランス語の mode (流行)から出て來た英語である。(註) 即ちそれは最も頻繁に現はるゝところの値、最もありふれた値、最も流行せる値である。それは總ての個々の値の影響を受けるものではない。由つてモードは、極端に大なる値の如きを知ることなくしても知り得られる。從つてモードは、最後の項を知ることなくしても、知り得られる。

（註）Mode を平均の一種たる平均の意味に初めて用ひたのは、Karl Pearson である。それは一八九五年のことである。此語の語源地であるフランスでは、mode なる語は統計學上では餘り多く用ゐられない。此語に代へて、古くは valeur normale なる語が用ゐられ、最近では dominante なる語が用ゐられてゐる。（Julin, Principes de statistique théorique et appliquée, t. I, p. 421.）

けれども私は、モードの場合にも、論理的には、平均せらるべき所の、換言すればモードが算出せらるべき最後の項を必要とすると思ふ。今例へば日本全體の米作地が、平地と山地との等面積の二種類の土地から成立し、平地にては米一石卅圓にて、山地にては三十一圓にて生産せられたとする。此場合に生産費のモードは何處にあるか。價格が三十圓以上に出でないとすれば、生産費のモードは三十圓であらうし、價格が三十一圓となれば、生産費のモードは三十一圓と三十圓との雙方となるであらう。即ち需要供給が適合するのが三十圓の價格に於てゞあるか又は三十一圓の價格に於てゞあるかによつて、生産費のモードも三十圓となり、又は三十圓並びに三十一圓となる。價格の決定した後でなければ、平均生産費は、此平均なるものをモードによる平均の意味に解釋しても、明らかにならない。

猪俣氏の平均生産費を如何樣に解釋するも、成立する價格に先行して存在する平均生産費の存在を私は想像することが出來ない。（次節に解說せらるゝが如きは、別問題である。）猪俣氏は、或ひは生産せられてゐる生産物の生産費を考へてゐるのかも知れないが、偶然に生産され終つた生産物の生産費は吾々の問題にはならない。例へば偶然に一石當り卅、卅一、卅二、卅三、卅四圓にて五石の米が生産せられ、卅、卅一、卅二、卅三、

卅四圓にて夫々二石の米を買はんとしてゐる人がある場合には此ら五石の米の生産費は吾々の問題にはならない。けだし此平均生産費にて價格が定まるとしたら、三石の米は必ずや賣り殘されて、流通市場から退場せねばならぬからである。吾々は平衡價格を論じてゐるのであつて、餘つた米は投げ賣られるか、貯藏せらるゝか、又は投棄てられるか、何れにしても市場から退けらるゝ商品を吾々は問題としないのである。即ち偶然に生産せられた生産物の生産費の平均なる概念其ものが全然意味を失ふのである。

かくの如く吟味を加へて見て來ると、商品の價格は、自由競爭下の平衡狀態に於ても平均生産費によつて決定せられると云ふ猪俣氏の大膽な所論は、毫末も妥當性をもたないとせられなければならない。

三

繰返して云ふが、商品の價格は需要供給の適合する點に於て決定される。それ以外には、商品價格決定の原理は如何なるものもない。平衡價格も偶然に生起する價格も、獨占價格も公定價格も一として此原理以外の原理によつて決定せらるゝものではない。如何に政府が公定價格を强制しても、供給者が其價格にて供給せず、需要者が其價格にて購はなかつたとしたら、賣買が成立しないのであるから、價格があり得よう筈がない。價格は現實に賣買が成立したときの現實の交換の比率である。だから公定價格を以て賣買せられるとすると、需要供給は其公定價格に於て一致したのであり、公定價格が現實の價格となるわけである。

總ての教科書に見られるやうに、需要とは、もし價格が幾何ならば、其價格に於て幾何を買はうとする商品の量を云ふ。價格が幾何ならばと云ふ其價格を離れて、單に買はうとする商品量の如きものはあり得ない。供給も同樣である。幾何の價格ならば幾何の商品量を賣るかと云ふことが供給である。價格が幾何ならばと云ふ其價格を離れて、單に賣らんとする商品量の如きものはない。

需要及び供給なる概念はかやうなものであるから、需要と供給とが一致すると云ふことは、賣らんとする量と買はんとする量とが同一の豫想價格に於て一致すると云ふことである。從つて需要と供給とが適合すれば、同一の豫想價格は現實の價格となるべきは自明である。

ところで此價格が、自由競爭下の平衡狀態に於ては、賣買せらるゝに至つた商品の各單位の中で最も多く生産費を要したものゝ生産費即ち最高の生産費に一致すること、而して此生産費を限界生産費と名付くれば、價格は限界生産費に一致する事實は先に述べしが如くである。云ふまでもなくこの價格決定の第二次的原理は、所謂生産費遞增の支配を受けてゐる商品に關してゐる。生産費がコンスタンである商品の場合には、限界生産費と平均生産費とは常に同一であつて、價格が限界生産費に一致するか、それとも平均生産費に一致するかの問題の如きは、問題として成立しない。生産費が遞減する場合には平衡價格は自由競爭下にはあり得ないとせられる。自由競爭下の平衡狀態に生産費の遞減することの行はるゝ事實を否定し、此遞減は獨占下にのみ行はれると主張する學者もなきにしもあらずであるが、通說は必ずしも此主張を認めてゐない。けだし、マーシヤ

ルウの所謂 External Economy なるものがあつて、企業の經營內部から生ずる生產費の節約に無關係に、生產費の節約が生產量の增大に伴つて生ずることがあり得るからである。とに角、生產費遞減の法則の支配する場合には、自由競爭が行はれるとすると、價格は次第に低下して行くだけで平衡點を見出し得ないと云ふのが通說である。

四

此らの通說のうちで、生產費がコンスタントである場合の價格にあつては、限界生產費と平均生產費とは相一致してゐるから、平均生產費と限界生產費と價格との間に存する關係の說明に關するものは、今日も依然として通說であつて、吟味の餘地は全く無いと云つてよい。また生產費遞減の支配する商品に於て、價格が平衡價格たり得ないことは、最新の立場を價格論上にとる學者と雖も、認めてゐる所である。Joan Robinson を一例として擧げよう。彼女は曰く、「平均生產費が、企業の擴大と共に、不斷に低下し、決して最低のポイントに達することが無いとすると、限界生產費は常に平均生產費以下にある。限界生產費は（或生產額の間だけ）遞增し、又は遞減し得る。もし限界生產費が遞增すれば、企業が平衡に達することが可能であり、價格は限界生產費に等しくなる。然し價格は平均生產費以下に下り、利潤はノルマルの以下に下り、此產業は平衡狀態に達しない。而してもし限界生產費が遞減すれば、企業は擴大し續くるであらう。かくて一企業者（又は他の企

業者との合同によつて）の擴大が行はれて、競爭が完全なることを停止するまで、企業者の數は減じて行くであらう」[1]と。

然るに、生產費遞增の法則の行はるゝ商品の價格については、限界生產費と平均生產費と價格との間に、從來の通說と異れる說明が、猪俣氏の說明とは異つた形式の下に、嚴密な論理の下に現はれて來た。第一節に述べたやうに、此異說はシャルツの論文に於て最も明確な形を具へて來たものゝやうである。異說が現はれて來た途行については、想像の限りではないのであるが、ワルラスの近年に於ける復興に端を發するのではないかと思はれる。ワルラスの平衡價格理論の體系の中に "les prix de vente des produits sont égaux à leurs prix de revient en services producteurs" を示す一群の方程式

$$a_t p_t + a_p p_p + a_k p_k + \cdots\cdots = 1$$

$$b_t p_t + b_p p_p + b_k p_k + \cdots\cdots = p_b$$

$$c_t p_t + c_p p_p + c_k p_k + \cdots\cdots = p_c$$

$$d_t p_t + d_p p_p + d_k p_k + \cdots\cdots = p_d$$

があるが（aは土地用役、勞働、資本用役等の製造係數、$p_a \cdots p_b \cdots$は生產物の價格、p_t、p_p、p_kは地代、勞銀資本利子である）、此式の中で生產係數は一定と假定せられてゐる。換言すればワルラスの主著の少くとも前半に於ては、生產費コンスタントの法則のみが行はれると云ふ假定が存在してゐる。ワルラス以後の數理經濟

1) Joan Robinson, Economics of Imperfect Competition, pp. 95–6.

學者はワルラスの此所說を活かさうと努力したものゝやうである。而して限界生產費による價格說明と平均生產費による說明とを綜合せんと努力したものゝやうである。

此綜合の努力を吾々はよくパレートに見ることが出來るのではないかと思ふ。此點に關するパレートの所說の詳細を他日を期して研究したいと思つてゐるが、彼に於ても、生產費遞減の法則の支配を受くる商品の價格が不安定であると考へられてゐることは勿論である。「生產費の遞減する商品に關しては、吾々は、實際に於て、理論の上で與へられた二つの平衡點を見るのである。然しそこには、激しい摩擦と動搖とがあるのであつて、頗る長い間不安定平衡狀態にあるものである。例へば鐵道會社があるとして、此會社は、料金を高くし、運輸等を少くして、費用と收入とをバランスすることも出來れば、又は料金を低くし、運輸の量を多くして費用と收入とをバランスすることも出來る。……小さな商店は高い價格で小量を賣る平衡點を求め、百貨店は低い價格で多量を賣る平衡點を求める。」[2] 從つて平均生產費原則と限界生產費原則の折衷も勿論、生產費遞增の法則の支配する商品についてなされてゐなければならない。

とは云ふものゝ、パレートが、平衡下に於ける價格と生產費の一致を云ふ場合には、價格と平均生產費が意味されてゐる。實はパレートが生產費と云ふ場合に、それは平均生產費の意味であることが多い。例へば彼の生產費の定義は次のやうになつてゐる。"Si on tient compte de toutes les dépenses nécessaires pour obtenir une marchandise, et si on divise le total par la quantité de marchandise produite, on a le coût de production

2) Pareto, Manuel d' économie politique, p. 351.

de cette marchandise"[3] ところで、生産費と價格が一致する場合とパレートが云つてゐるのは、生産費のコンスタントの場合であると云ふ想像が吾々につく。このことを吾々は次のパレートの所説から言ひ得るであらう。

"Les entrepreneurs et les consommateurs agissent selon le type I. Cet état est caractérisé par l'égalité du coût de production et du prix de vente des marchandises. Nous supposons que cette égalité a lieu pour le total des recettes et des dépenses. Lorsque les prix sont constants et qu'il n'y a pas de frais généraux, cette égalité entraine aussi l'égalité du coût de production et du prix de véute de la dernière parcelle produite"[4] こゝで注意しなければならないことは、此引用の最後の部分に明らかであるやうに、パレートに於ても、限界生産費なる概念は考へられてゐるし、また其作用も認められてゐたと云ふことである。然し生産費遞增の法則の支配する生産の場合に、パレートは如何に平均生産費原則と限界生産費原則を活かしたか。自由競爭の概念を極めて嚴格になすことによつて、同じ生産部門の各企業は、自由競爭の結果、何れも同じ生産費曲線をもつに至ると考ふることによつて、それらを活かしたやうに見える。同じ生産部門の各企業が何れも同じ生産曲線をもつと云ふことは、實は生産費のコンスタントなる場合に既に豫想されてゐる。この豫想が生産費遞增の法則の行はるゝ企業にも豫想さるゝに至るべきことは、パレートに於て必ずしも不思議ではないと思はれる。

とにかく、私から見れば、パレートのうちには、たしかに平均生産費原則と限界生産費原則とを共に活かさうとする努力、それらの綜合の努力があつたやうに思はれる。

3) Pareto, Manuel, p. 218.
4) Pareto, Manuel, p. 611.

パレートの綜合が充分に意味もち得るや否やをこゝでは問題にしない。恐らく此綜合に刺戟せられて、シャルツの研究が生れたのであらうが、シャルツの所説にあつては、限界生産費原則がパレートの所説にあつてよりも、遙かに前面に出てゐるのであり、限界主義經濟理論が學界に支配的となつてゐるがために、寧ろ限界主義を根本的原則とし、それに平均生産費原則を配したのであらうと想はれる。シャルツの後に現はれたものは、Chamberlin の所說 (The Theory of Monopolistic Competition, 1st Editon, 1933.) や Joan Robinson の所說 (The Economics of Imperfect Competition, 1933) を初めとし、Albert L. Meyers の教科書 Elements of Modern Economics に至るまで、理論の骨子に於てシャルツの所論と殆んど全く異る所がないのであつて、私は問題をシャルツに就いて研究して見る。シシャルツの云ふ所は大要次の如くである。

生産者の最大利潤を生ぜしむる點は如何にして定められるか。限界生産費が市場價格に等しくなる生産額を見出し、同時に限界生産費と平均生産費とを等しくなさしめるやうな生産額を見出すことによつて、それは定められる。其證明は次の如し。

p_b, c_b, q_b は夫々當面の問題たる商品の價格、平均生産費、生産額であるとする。企業者はその純收入 G_b を最大ならしめようとする。

$$G_b = (p_b - c_b)\, q_b \qquad [1]$$

此 G_b の最大たるべき條件は

$$\frac{dG_b}{dq_b}=\frac{d\left[(p_b-c_b)\,q_b\right]}{dq_b}=0$$

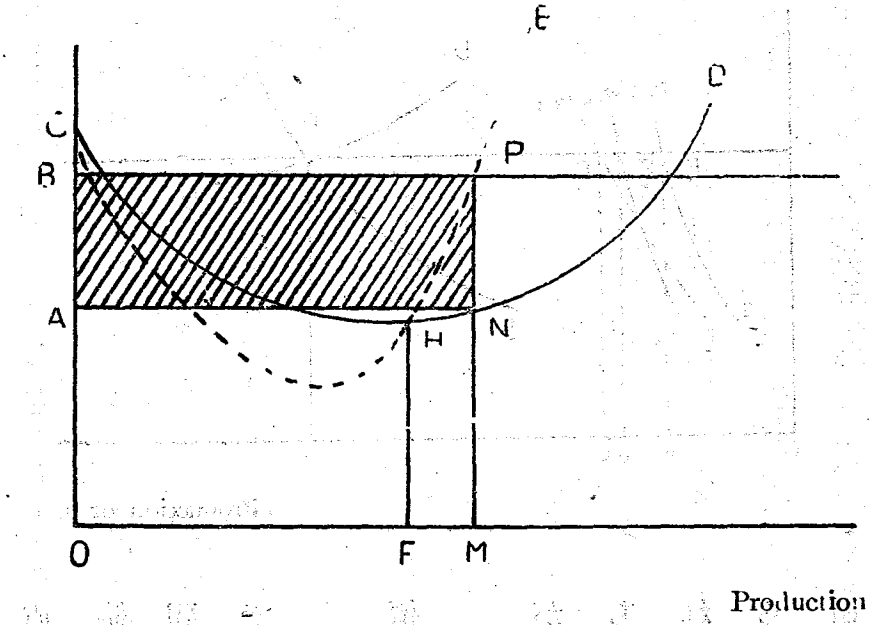
であり、これから

$$p_b-\frac{d(c_bq_b)}{dq_b}=0$$

$$\text{or}\quad p_b=\frac{d(c_bq_b)}{dq_b} \qquad [2]$$

が導き出される。然るに $\frac{d(c_bq_b)}{dq_b}$ は生産額 q_b の函數としての總生産費函數 c_bq_b の微分係數であるから、限界生産費である。由つて、限界生産費と價格とを等しからしむる生産量が最大の利潤點である。

圖に於て、限界生産費曲線は曲線 CHPE によつて示され、最大利潤は面積 ABPN により、〔2〕の條件は、價格を示す直線 BP の高さと限界生産費 MP との等しいことによつて示される。

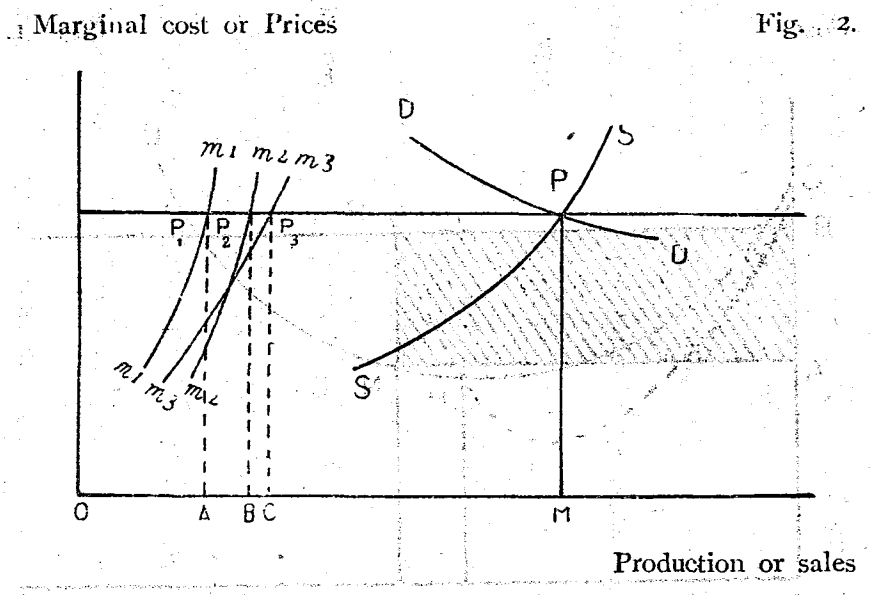


以上のことは他の企業者に於ても同樣である。

さて〔1〕に於て既に平均生産費が現はれてゐるが、今これと限界生産費の關係を見なければならない。

圖によつても明らかであるやうに、平均生産費曲線が下降してゐる限り、限界生産費曲線は此平均生産費曲線の下にある。また平均生産費曲線が上昇してゐる限り、それは限界生産費曲線の下にある。平均生産費線が直線ならば限界生産費曲線もまた直線である。所で限界生産費の下降する場合及び部分（圖に於ける）は獨占のそれであり、こゝでの問題にはならない。然らば〔2〕の條件は右に述べしが如くになるわけである。

Fig. 2.



然し各生産量が市場に現はれ、新企業者が現はれて來ると、市場價格も生産費も變化し、新なる平衡點が出て來ねばならない。此新なる平衡點を求めて、個々の生産者の關する限りでは、N點が右又は左へ移動する。而して平衡點は新しい平均生産費の上に落ちるであらう。たゞこゝで個々の企業者の働きの結果を見ようとすれば、既に一定の存在として假定せられてゐる價格を動かさねばならない。即ち直線 BP の縱坐標を變化せしめつゝ、所謂需要曲線を置かねばならない。

また個々の生産者の限界生産費曲線から、總限界生産費曲線を作つて、供給曲線を置かねばならない。これ

を作るには、個人の限界生産費曲線の横坐標を加ふればよい。第二圖に於て、DD は需要曲線、SS は供給曲線である。個々人の限界生産費曲線は m_1m_1, m_2m_2, m_3m_3 である。勿論三人の供給者しかないとすれば、價格の問題は不定であるが、こゝでは三人を多數人と見て、説明の便宜を期する。需要曲線と供給曲線との交點は平衡點であり、之によつて價格も、各生産者の供給量も決定する。價格 PM. 供給量は OM である。此供給量のうち、OA は一なる人の、OB は二なる人の、OC は三なる人の供給量である。

こゝで知られるやうに、各供給者の限界生産費は價格に等しい。即ち

$$p_1A = p_2B = p_3C = PM$$

である。

ところがシャルツによればこの平衡は安定均衡ではないと云ふのである。其理由は極めて重要であるから、原文のまゝをこゝに引用する。

"The equilibrium thus established will not, however, remain undisturbed, for two reasons: First, the market price will not in general be the one on which the various producers based their computations of maximum profit. Second, as long as some producers are making a profit, new producers will be tempted to enter the field. The result will be a series of adjustments to the new situation, giving rise to a new set of cost curves

and a new market price. This competition will have the effect of ultimately (never realized, but giving rise to a moving equilibrium) compelling all entrepreneurs to adjust their output until they have reached the point of lowest average costs. The marginal cost of each entrepreneur will then be equal to his lowest average cost, and both will coincide with the market price.

"It is reasonable to suppose that the final cost curves which will thus emerge from the many modifications of the old cost curves will, in general, have only minimum point, so that curve CD of Fig. 1 will also serve as a graphic illustration of the final equilibrium situation for a typical producer. His longtime equilibrium cost will be HF, which is the ordinate of the lowest point H on the average cost curve.

"It can easily be shown that the marginal cost curve CHE intersects the average cost curve at the point H, so that for the long-time normal output OF, the average cost is equal to the marginal cost and is also equal to the price. This will be the same for all other producers and will be equal to the long-time equilibrium price. The output of the producer in question will be OF. The output of the entire industry will be the sum of the lowest-cost outputs of the various producers. The commodity will then be produced under conditions of uniform cost. In other words, the relations

$$P_x = \Pi$$

$p_x = \pi_x$

will then be satisfied, and the entrepreneurs will make neither profit or loss. But this may be impossiple of realization, as is the case when the cost curves rises from the very start."[1)]

此シヤルツの所說と殆んど同樣の所論が我國では中山伊知郎博士の「純粹經濟學」にも、また栗村雄吉氏の論文「完全競爭の理論」（經濟學研究七ノ三）及び同氏の「獨占價格理論」にも見出される。

だが、私が讀みとり得た範圍では、シヤルツが、私によつて右に引用された最後の一句によつてなした制限は、我國の學者の場合には見當らないやうに思はれる。シヤルツが "But this may be impossible of realization, as is the case when the cost curves rises from the very start." と云つた意味は正確に何であつたか、必ずしも理解し難いのであるが、恐らく、生產費遞增が縱軸から不斷に行はれてゐる場合には、價格と平均生產費と限界生產費の一致は不可能であると云ふ意味であらう。

シヤルツによつて右の句に何が意味せられたかを問題となさずとも、私は、價格は限界生產費と平均生產費とに等しい（平衡狀態に於て）と云ふ主張を一般的命題として受容するわけには行かない。何となれば限界生產費が縱軸から不斷に遞增して行く場合には、限界生產費と平均生產費が一致すると云ふことは如何にしても考へることが出來ない。限界生產費は必ずや平均生產費の上を走るであらう。如何なる點に於ても兩者は交はらない。限界生產費が當初遞減し、後遞增する場合に於てのみ平均生產費と限界生產費との一致があり得るので

1) Schultz, Marginal Productivity and the General Pricing Process, Journal of Political Economy, Oct. 1929, pp. 536-7.

ある。これだけを明らかにしたゞけで既に、限界生産費と平均生産費と價格とは平衡狀態に於て一致するとの新說は一般的妥當性をもつ理論でないと云ふことが出來る。

勿論、生產費遞增の曲線と雖、必ずや初め下降すると云ふ議論もあらう。從つて此曲線の形は先の第一圖の(CHND)のほかのものではあり得ないと云ふ議論もあらう。中山博士の所說も大要さうのやうである。然しシヤルツは先の引用の最後の句によつて、生產費が縱軸から不斷に遞增して行く場合の可能なることを認めてゐるのである。もし一定の資本設備を以て生產し始むる場合ならば、生產費が初め遞減し、後遞增することもあるには相違ない。然し是を一般的事實として主張することは出來ぬ。殊に生產費遞增の法則の下に於て、各生產量に最適な生產方法が採用せられて差支ないのである。ピグーの所謂"appropriately organised"の組織に[1]生產が行はれて差支ないのであるから、生產の當初から生產費が遞增することは充分に可能である。それのみではない、生產費遞增の法則の行はれるのは、主に農業に於てゞあつて、且つ農業に於ては如何なる單位數の生產財も相互に appropriately に結び付き得るのである。もしかくの如きことが可能であるとすれば、限界生產費と平均生產費とが一致すると云ふことは不可能であつて、此點に於て新說は重大なる制限を受けなければならない。

第二に、シヤルツによれば價格が限界生產費と一致するだけでは安定的平衡は現はれないと云ふが、こゝに疑問がある。換言すれば、限界生產費と價格が一致してゐて、或生產者が特別な利潤を得てゐると、新しい生

1) Pigou, Economics of Welfare, p. 134 (ed. 1929).

産者が現はれて來て、結局市場價格が引下げられて、生産量が增大すると云ふシャルツの說明に私は疑問をもつ。先に引用した一節の中で、シャルツは "The equilibrium thus established will not remain undisturbed, for two reasons: First, the market price will not in general be the one on which the various producers based their computations of maximun profit. Second, as long as some producers are making a profit, new producers will be tempted to enter the field." と云つてゐるが、此前段の所論が正しいとして、また後段の所論が正當であるとしても、限界生産費が平均生産費と等しくなつて來るとの結果は出て來ない。一たい限界生産費の遞增の法則なるものは、或一企業內部の生産費遞增の事實を意味してゐるのではない。一商品市場に於ける供給即ち生産量の生産費の遞增を意味してゐる。故に "new producers" が市場に現はれて來た所で、此ら生産者は既存の生産者よりは遙かに多くの生産費（單價）を必要とすると云ふ事情に置かれてゐる。さうでなくして、既存の企業者と同じ水準に於て競爭し得ると云ふ風に考へることは、生産費遞增の法則の概念其ものに反するのである。此法則は企業內部の生産費の法則ではない。もとより市場の供給の生産費遞增の法則は企業內部の生産費の遞增をも內容として含んでゐる。然し後者が直ちに市場の供給の生産費遞增の法則其ものではない。

實際のところ、企業者は商品を限界生産費で賣出さうとするのでなく、平均生産費で賣出すのである。此個々の企業者の平均生産費がAなる人に於ては卅圓、Bなる人に於ては卅一圓、Cなる人に於ては卅二圓、次の人に於ては卅三圓と云ふ風になると云ふのが、生産費遞增の法則の內容である。教科書では說明の便宜上、一

企業の内部に於て生産費が遞増し、之が價格を決定する（通俗的意味に於て）かの如くに說いてある。これは說明上の便宜に出でたものに過ぎない。

一企業内部にあつては、平均生産費が最も低いのは、限界生産費と平均生産費の一致する場合である。生産費が初め遞減し、後遞增すると云ふ前提を許す限りに於て、此ことは如何にするも否定することが出來ない。だが此平均生産費は夫々の企業に於て異つて現はれてゐる場合こそが生産費遞增の法則の支配を受ける場合である。此平均生産費がどの企業者に於ても同一であると豫想すれば、それは正確に云へば、生産費コンスタントの場合に過ぎない。而して各企業者が賣る場合の最低の生産費即ち此ら平均生産費が異つてゐて、比較的に高い平均生産費をもつ企業者の生産量をも市場が需要するとしたら、市場價格が限界生産費たる平均生産費によつて定まるべきは疑ひを得れない。然し此結論は從來の理論其ものでしかない。たゞ從來の理論は企業者の賣らうとする供給價格が企業内の平均生産費であると云ふことを明瞭に云はなかつたと云ふ事實があるのみである。

然るにシヤルツの新說は、何れの企業者の平均生産費も、市場價格と等しい所の限界生産費と等しいと云ふ主張を内容とする。私は、今のところ、シヤルツの此點についての論理の運用に追隨することが出來ない。